様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６８１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０１８１

研究課題名（和文）山口勝弘のデジタルアーカイブ作成：日本メディアアート生成史の研究および記録化

研究課題名（英文）Yamaguchi Katsuhiro Digital Archive: Documentation and Research of the History of the Formation of Japanese Media Art

研究代表者
シャルル　クリストフ（CHARLES, CHRISTOPHE）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：５０３１９２２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、メディアアートの先駆者、山口勝弘が1940年代から収集した資料（手稿、印刷物、映像など）のアーカイブ化によって、戦後の日本におけるメディアテクノロジーを用いた芸術を研究するものである。アーカイブの媒体として、ウエブサイト制作を中心に作業を進めた。
山口勝弘の仕事に於ける中心的な概念「イマジナリウム」というのは、イマジネーションを刺激する作品が成立するために、作家、研究者、理論家と観客の間の「コミュニケーション」が必要不可欠であることを示唆している。今回のアーカイブに記録された作品や文章は、ネットワーク上で可能になったコミュニケーションによって、新たに展開していくと考える。

研究成果の概要（英文）：Yamaguchi Katsuhiro, pioneer of media art, has produced and collected material (manuscripts, printed material, photos, video, etc.) since the 1940s. The aim of our research is to study media art (art using media technology) of post-war Japan, through the collected material of Yamaguchi. To realize this archive work, we have chosen to concentrate on the production of a website.
Yamaguchi Katsuhiro’s central idea is called "Imaginarium". He states that the communication between the artist, the researchers, the theorists and the audience, is essential to any art work aiming at stimulating the human imagination. We thus consider that the artworks and texts featured in the “Yamaguchi Katsuhiro Archive” will continue to develop through such a communication, which is actively promoted through this website.
http://yamaguchikatsuhiro.musabi.ac.jp

研究分野：芸術（メディアアート）

キーワード：メディアアート　ビデオアート　山口勝弘　アーカイブ化　データーベース化

１．研究開始当初の背景

日本のメディアアートに関しては、国内では、展覧会カタログ、専門雑誌に掲載された記事は多く存在しているが、1990 年代まではメディアアートに関する学術的な研究はなされていなかった。科学、技術と芸術の融合をテーマとしたミュージアム「NTT インター・コミュニケーション・センター」(「ICC」)は 1997 年に開設される以前、1992 年から発行された「InterCommunication」(「季刊インターコミュニケーション」、NTT 出版）において、芸術と科学の関わる様々なテーマに関する数多くの論文、記事や対談記録が掲載されたが、歴史的な検証が充分に行われていなかった。国外では、オーストリア・リンツ市のアルス・エレクトロニカ・センター（ARS ELECTRONICA)、ドイツのカールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター（ZKM)、ロサンゼルスの Paul Getty Center、ニューヨークの MOMA（近代美術館）やグッゲンハイム美術館という機関では、日本のメディアアートの作品の保管や展示のみならず、歴史的研究や研究成果の出版活動が行われている。しかし、これら欧米の研究は日本におけるメディアアートについての多くの重要要素が欠如している。学術研究として、筆者の博士論文（筑波大学大学院芸術学研究科、1996 年 3 月に学位を授与)「日本の映像芸術-ビデオアートを中心に」(1951 年～1995 年)」は初めてこれを補い、その後、風間正の「現代映像芸術論―映像作家活動の思想的背景 1970 年 - 2000 年」(出版文化研究会、2007 年)、伊奈新祐の「メディアアートの世界―実験映像 1960 - 2007」(国書刊行会、2008 年)、坂根厳夫の「メディアアート創世記 - 科学と芸術の出会い」(工作舎、2010 年）が出版されてきた。そして馬定延の博士論文（東京芸術大学大学院映像研究科、2011 年 3 月に学位取得)「日本におけるメディアアートの形成と発展」において、日本のメディアアートは作品の内容やコンセプトよりも、日本の社会、教育制度や企業との関係の側面からの研究対象とされた。馬定延の博士論文は 2014 年に「日本メディアアート史」という題名で出版された（アルテスパブリッシング社)。筆者シャルルと馬定延の論文では、日本のメディアアートの発展において山口勝弘は中心的な役割を果たしていることは明らかにされたが、まだ分析されていない、参照されていない山口氏の文献、作品や映像資料は多く残っている。また、申請者が研究分担者だった「戦後の日本の芸術とテクノロジー」(平成 16 年度、基盤研究 B）という研究（東京国立近代美術館、研究代表者：松本透）が 2006 年に終了した時点では、山口勝弘の写真資料や映像資料の一部はデジタル化されたが、膨大な数であるため、一部のビデオテープと執筆資料のデジタル化とアーカイブ化の作業は残っている。つまり、山口勝弘の個人作品のデジタルビデオテープ（数十時間分)、写真やドローイング、図版、展覧会パンフレット、チラシなどの資料などは一部デジタル化されたが、アナログのビデオテープ（3/4 インチ U-MATIC テープ 300 本：150 時間以上、VHS テープ約 150 本：200 時間以上、VHS-C テープ約 70 本：20 時間以上、1970 年代前半に使用されていたオープンリールテープ：20 時間以上）やオーディオテープ（数時間）のデジタル化はまだ行われていなかった。その他に、文献（手書き、論文、記事、講義の記録など)、そして山口勝弘が 2001 年以降描いた絵画やドローイングも多くある。メディアテクノロジーを使用せず構想された作品とは言え、1950 年代からの山口勝弘のメディアアートへの考え方も反映しているものとして、それらの作品の撮影とカタログ化、そして作家本人の解説の記録も重要な作業であると考えた。経年変化による資料の劣化などが当面する大きな問題のひとつである。よって現

時点で資料をデジタル化し、またはそれらの資料を早急にアーカイブ化することは重要かつ急務であると考えた。
本研究は、日本のメディアアート史の重要な一端を担う山口勝弘に関わるすべての資料をまとめ、アーカイブ化し、それをもとに実証的に検証する国際的研究である。

２．研究の目的

本研究は、戦後の日本における、メディアテクノロジーを用いた芸術、すなわち「メディアアート」を研究しようとするものである。1940 年代から 2010 年代まで活動し続けてきたメディアアートの先駆者、山口勝弘の文献と映像資料をアーカイブ化することによる研究となる。山口勝弘は、1950 年代にグループ「実験工房」を設立し、1970 年代にキネティックアート、ライトアートなどという環境芸術の基礎を築き、1970 年の大阪万国博覧会の三井グループ・パビリオンのプロジェクトによって芸術と社会との接点を定義し直し、1970 年代と 1980 年代には「ビデオアート」や「ハイテクアート」、1990 年代に公的空間での「パブリックアート」の様々な作品や企画を実践した。展覧会やフェスティバルをプロデュースする他、新時代のアートセンターである「淡路島芸術村」の考案と設計を行った。作家やプロデューサーとしての活動と同時に、その基盤となる理論も構想した。1950 年代以降、芸術、デザインや建築について、専門雑誌での執筆、教育機関（1970 年代半ばから筑波大学教授として芸術教育に勤め）での講義や演習、さらに「環境芸術学会」を立ち上げたことによって、国内外の芸術を紹介し、分析し、分類し、体系化し、そして独自の考え方によって総合芸術としての「環境芸術」を築いたのである。山口勝弘の 1950 年代から制作した作品、そして集めてきた資料を参照しながら、メディアアートを芸術史、技術史、産業デザイン史など多角的視点からアプローチすることで、戦後の日本の芸術史を検証することとなる。研究結果は、メディアアートを芸術史の中に体系的づけることができ、さらには同時代の国外のメディアアートとの関係が解明される。

３．研究の方法

本研究の内容は、指導的な立場で活動を続けてきた山口勝弘が制作・集積した文献や映像の資料、ならびに関係資料の調査とアーカイブ化を行った。映像資料と文献資料のデジタル化を行い、実際のデータの量を計り、整理しながら、インターネット検索システムを構築し、テストし、最終年度（27 年度）は、研究成果を総括し、インターネット検索システムを完成した。要するに 4 年間の研究を大きく３点にまとめた。① 山口勝弘の資料（手稿、印刷物、写真、映像、絵画やドローイングなど）をデジタル化した。② そのアーカイブを体系化し、検索方法を研究した。③ アーカイブを検索するシステムを設計し、インターネット上で公開した。山口勝弘のアーカイブのデータバンクの保管サーバーは、武蔵野美術大学映像学科のサーバーからアクセスするものである。

４．研究成果

近年、日本のメディアアートに関心を海外の示す研究者が増えており、資料提供の問い合わせも多くなってきている。資料のアーカイブを制作し、海外から閲覧が可能になる状況をつくることは重要であることが明らかになった。アーカイブの媒体として、ウエブサイト制作を中心に作業を進めた。

山口勝弘氏は1940年代から、自分の作品に関する資料（制作用のメモ、ドローイング、作

品の記録など）のみならず、日本及び海外の芸術、デザイン、建築、その他様々な分野に関する多くの資料を集めており、大量の書籍、雑誌、カタログ、図録静止画、動画などを収集し、保管した。山口氏の資料は品川区大井町のアトリエと、淡路島の工場を中心に保管されていたが、両方の倉庫から武蔵野美術大学のクリストフ・シャルル研究室に運搬し、現在は資料の90パーセントを武蔵野美術大学で保管している。現時点ではテキスト資料1500件以上をスキャンし、VHS、DV、8ミリ、U-Matic など様々なフォーマットの映像資料を合計500本以上のデジタル化を行なった。

山口勝弘アーカイブのウエブサイトには下記のカテゴリーを作成し、現在は約100項目を掲載している。「1-略歴」、「2-アート＆デザイン」、「3-グローバルアート」「4-個展」、「5-グループ展」には、様々な種類の作品、及び山口氏が参加した、企画した、プロデュースした様々な催しに関する画像、図版、論文、記事や説明文を載せている。「6-研究・教育」に於いては、山口氏が執筆した「単独著書」（8科目）、「論文・記事」（約800項目）、「講義」（約100項目）の一部を公開している。

言うまでもなく、ウエブサイトは紙媒体の書籍と異なり、利点としては、動画、音声を利用することも可能である。また「ウエブリンク」によって、複数の項目の関係性が明らかになる。そして検索機能によって、探している項目や、相互関係を持っている項目を一瞬にして見つかることもできる。さらに、自動翻訳機能によって、様々な言語で書かれたテキストの内容を把握することも出来る。それは特に、海外からアクセスしている研究者にとってはたいへん便利である。そして多くの研究者が資料を閲覧することによって、意見交換も頻繁にできることで、資料の出典確認、内容の照らし合わせ、より正確な情報をシェアすることが可能となる。

特に山口勝弘のキー・コンセプトの「イマジナリウム」の意味性を考えた場合は、イマジネーションを刺激する作品が成り立つために、作家、研究者、理論家と観客の間の「コミュニケーション」は必要不可欠である。そのようなコミュニケーションを可能とするメディアの充実化は大変有意義であると考える。メディアアートの観点から、作品はネットワークの中で成り立つという状況であり、実際に展示された際に観客の参加によって「活きて」くる。「作品が完成された状態で展示されるのではなく、美術館が制作工房化してゆくことあるいは新しい情報のネットワークのなかで、作品が形成される。（略）これらの作品の形成過程を、通信回線上の情報ネットワークに乗せて、地球上の空間・時間の差を無視し作品の共同制作が可能となる」（「イマジナリウム系譜」より）。言い換えれば、山口勝弘は、作品を閉じて完結したものとするよりは、様々な芸術分野への解放を目指し、常に揺らしておきたい、拡散させたい、と望んでいるようである。もはやたった一つの中心はなく、そのかわりに複数の可動的で多機能の中心が生まれている。これは、デジタル化の一般化と呼応する。今後、作品が「完成」したと言った場合、それは、ネットワークの中の動きに応じて常に柔軟に姿を変えることができるということを意味する。今回のアーカイブの場合も、記録された作品や文章は、ネットワーク上の新たなコミュニケーションによって再び活きてくると考える。

ウエブサイト内容詳細：
（海内外の研究者向けのウエブサイトでもあるため各項目を日本語・英語表記）

固定ページ： 山口勝弘アーカイブ：概要＆クレジット - The Yamaguchi Katsuhiro Archive: About & Credits

1-0- 略歴、作品一覧 - Biography, Works Lists
1-1- 略歴 - Biography
1-2- 作品一覧 - Works Lists

2-0- アート＆デザイン- Art and Design
2-1- 絵画 - Paintings
2-2- ヴィトリーヌ - Vitrines
2-3- グラフィックデザイン・インテリアデザイン - Graphic Design, Interior Design
2-4- 彫刻・オブジェ - Sculptures, Objects
2-5- ビデオテープ - Video Tapes
2-6- ビデオ彫刻・ビデオインスタレーション - Video Sculptures, Video Installations
2-7- パフォーマンス - Performances
2-8- パブリックアート - Public Art

3-0- グローバルアート Global Art
3-1- 実験工房（1951年～1958年） Experimental Workshop (1951-1958)
3-2- ビデオひろば（1972年～1974年） - Video Hiroba (1972-1974)
3-3- アールジュニ（1981年～1988年） - Arts Unis (1981-1988)
3-4- 淡路島芸術村（1992年～2001年） - Awaji Art Village (1992-2001)
3-5- 環境芸術学会（2000年～） - Institute for Environmental Art and Design (2000-)

4-0- 個展 - Solo Exhibitions
4-1- 1950s - 1950年代
4-2- 1960s - 1960年代
4-3- 1970s - 1970年代
4-4- 1980s - 1980年代
4-5- 1990s - 1990年代
4-6- 2000s - 2000年代

5-0- グループ展・企画プロデュース - Group Exhibitions: Participation, Organization & Production
5-1- 1950s - 1950年代
5-2- 1960s - 1960年代
5-3- 1970s - 1970年代
5-4- 1980s - 1980年代
5-5- 1990s - 1990年代
5-6- 2000s - 2000年代

6-0- 研究・教育 - Research & Education
6-1- 単独著書 - Books
6-2- 論文・記事 - Articles
6-3- 講義 - Lectures
6-4- メモ - Memo
6-5- その他 - Others

7-0- 関連資料・インタビュー・対談 - Reviews & Interviews
7-1- 関連資料、レビュー、評論 - Related Documents, Reviews, Critic
7-2- インタビュー、対談 - Interviews

8-0- Other Documents - その他

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
Samuel Bianchini, Christophe Charles, Jean-Louis Boissier, Nicolas Bourriaud 他、The MIT Press, 「Practicables - From Participation to Interaction in Contemporary Art」、2016、864 (143-157)

〔ウエブサイト〕
http://yamaguchikatsuhiro.musabi.ac.jp

６．研究組織

研究代表者

シャルル クリストフ（CHARLES Christophe）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：

50319224